

174

15

習學寮十二境記

自序



第五百奇學校を熊本城の辰巳肥田の地に
あり南を日向のむかし北に肥田山の秘窟に依
むま地なる奥ふしと郵あり泉あり林あり花
あり木あり四方の証を秋にびくみくし
朝夕の景色晴雨ふつとてわくしとくまに
夢を連して立ててるのり学素よりる
その樓に登りて詠見やまは山崎を望嬌
うして幸より十里のむくとる日め向ふ素より

花紅に柳緑ふして名所意流のありあり枕
 床の下にまねる遊馬のつる天機に緝れ
 て何れう學の程うゝゝん此程こゝろき
 とあ物ふしてのち文をよみ業をうらゝえ
 まゝ茲に存するぬ學の何なりとらねたに
 は身まてゝるの意をを撰て物々しく人のなき
 いざと口をくゝゝゝや一は存するておのれ
 禱る者ありおの世もあやうはるねたけふ
 もうゝゝいつゝあゝゝ成の長か月の如つ

方いさくかぬえくろに十二境のねほに先
つえいひてせの京色と記せりうのなめを
よりそにいひもてあつたりあつとせしつらみ
れ子に名つくることなきいの名あてて
てせの朝をも願みと物しうらうの中い
若め名取のちうらうをまねか
名とせしうらうつらうし人のあ
ふとせしうらう